

「デザイン」を活用した 大阪・神戸の取り組み

1951年、米国視察から帰国した松下幸之助の第一声は「これからはデザインの時代や」だったという。高度成長期に入り、それまで「化粧程度」と軽んじられていたデザインを、経営戦略の一つに位置づけようとする機運は関西から始まった。以下では、大阪と神戸における「デザイン」を活用した経済活性化策や街づくりなどを紹介する。

デザイナーと経営者の出会いを演出する 大阪デザインセンター

1960年に大阪府・大阪市・大阪商工会議所により設立された「一般財団法人大阪デザインセンター」（大阪市住之江区）は、大阪における産業デザイン振興の中心である。その主な業務のひとつは、「デザインビジネスプロモーションセンター（DPC）」（同）の運営だ。デザインに関する無料の相談・指導、デザイナーの紹介、専門アドバイザーの派遣などを通じて、中小企業の製品開発や販売促進をバックアップする。企業がデザイナーを紹介してほしい場合、DPCに業務内容や条件を伝えると、DPCは約300名の登録デザイナーの中から

ら相談内容に適していると思われる複数のデザイナーを紹介する。企業は紹介されたデザイナーと面談し、最終的に一人に絞り込む。こうした企業とデザイナーとのマッチングは年間100件におよび、成約率は60%を超える。この高い成約率を可能にしている一因は、これも大阪デザインセンターが運営する「大阪デザイン振興プラザ」の存在である。同プラザは、インキュベーションオフィス20室、デザイナーズオフィス40室、豊富な専門書ライブラリーを備え、デザイナーの「育成」、新しいデザインを創り出す「情報発信」、デザインに関するヒト・モノ・カネの「交流」を行っている。



「デザインビジネス塾」は、今年6月に第5期がスタートした。

ひとつ口にデザイナーといっても、広告、パッケージ、WEB、インテリア、店舗など専門は

細分化され、また各人の個性も様々だ。企業がデザイナーと協力していくためには、人間同士の「相性」が重要なファクターになる。その点、同センターの職員は、異なる分野のデザイナーと同じスペースで普段から顔を合わせているので、その専門分野や個性を熟知している。この環境が、適切なマッチングを生むのだ。

デザイナーの育成という面では、「デザインビジネス塾」が、デザインを通じて、問題の発見と解決が図れる人材、新しいビジネスを創造できる人材を育成している。本年6月には第5期がスタートする。1期20名、世界で活躍できる人材を5年で100名発掘・育成するのを目指している。

また、企業の経営幹部などを対象に、「デザイン活用の総合的な経営手法を研究する」「デザインマネジメント研究会・坂下塾」も開講して



大阪デザインセンターでは、経験豊かな職員が企業の希望条件などをじっくり聞き、要望に合ったデザイナーとの出会いの場を作っている。

いる。前年度には、この号の巻頭言を執筆していただいた山内陸平氏も当塾の講師を務めた。大阪デザインセンターでは、今後さらにデザインビジネスにコミットし、シーズを活かし、ニーズを押さえた新商品開発に取り組んでいくこととしている。

暮らしの豊かさや経済の活性化を図る 「デザイン都市」神戸

一方、2008年にユネスコから「デザイン都市」に認定された神戸市は、「住み続けたいなるまち、訪れたくなるまち、持続的に発展するまち」をめざし、「デザイン」によって新たな魅力を協働と参画で創造する都市」をつくらうとしている。

2011年、同市は、「都心・ウォーターフロントエリア」（ハーバーランドからHAT神戸まで）を中心としてクリエイティブな活動を展開するという、新しい「港都・神戸」の将来構想



多くのデザイナーが集う「KIITO」（旧神戸生糸検査所）。

を発表した。それを受けて、翌年には旧神戸生糸検査所がリニューアルされ、「デザインクリエイティブセンター神戸」（愛称 K-I-I-T-O）が発足した。多くの優れたクリエイターが建物内のスタジオを創造の場として活用しているほか、防災、環境、食、福祉、教育、まちづくりをテーマに、無印良品との協働事業が推進されている。今後、三宮、新神戸などのエリアごとに具体的なプランが作成され、さらに、各エリア間の回遊性を高めるために次世代型路面電車「LRT」（P12〜13参照）の導入も検討されている。また、神戸らしい景観を形成している建物などを表彰する「神戸市都市デザイン賞」等を制定しているほか、建物の高さなどのガイドラインを定め、山並みと海が近接する神戸らしい景観の形成に努めている。

デザインは、社会的な問題を解決するためにも活用されている。同市のウェブサイトに「ストレスマウンテン」は、心の健康を守る（自殺予防）ためのサイトで、過去6カ月間の自分の出来事をチェックすることにより、ストレスの程度が山の高さや色で分かりやすく表現される。さらに、同サイトでは、各種相談窓口の紹介などの情報提供も行っている。また、「できますゼッケン」は、被災地の避難所生活者のために、ボランティアなどが自分ができることを表示するためのものだ。このゼッケンは役割ごとに4色あり、例えば、力仕事や掃除などの「生活支援」は緑色だ。自分ができることと名前を記入し、背中に貼って使用する。大震災を経験した神戸発のデザインは、東北の被災地で効果

を發揮している。

優れたデザインを生かしたもののづくりの振興を狙って、同市は、前述のK-I-I-T-Oのほか、若手デザイナーを対象に知的財産権の知識やデザイン・マネジメント能力の習得のために「KOBEDデザイン塾」なども開講している。

さらに、ユネスコが認定した11のデザイン都市に同市の親善協力都市のテグ市を加えた「ユネスコ・デザイン都市フォーラム in KOBE」（2011年）や日中韓の都市による「アジア・デザイン都市フォーラム2013」を開催して意見交換を図るなど、国際的なデザイン先進都市との連携を積極的に推進している。



ボランティアが「自分ができること」を宣言する「できずゼッケン」。役割別に4色あり、赤は「医療・介護」、青は「ことば」、黄は「専門技能」、緑は「生活支援」となっている。